

◆八木健選 ～安遊駟句集『片羽』を読む～

膝の本ずり落ちさうや春暖炉

「ずり落ちさう」がいいね。なんとなく俗語的な言葉で、春暖炉や読書などの上品を乱しているのが滑稽。季語の春暖炉と眠そうな情景がぴったり合っている。

石鹼玉歪みて生れ出でにけり

観察眼の鋭さを買いたい。石鹼玉は完成して空中に浮いている時は真ん丸な形だが、ストローの先から出てくる時は歪んでいる。このことを俳句にした人はこれまでにいないね。

アイシャドウ付けて目力木の芽風

季語に木の芽風を使い、若さとさわやかさの句に仕上げた巧さが光る。季語と句の内容の付き具合が、その付き加減と言うべきか、離れ加減というべきか、実に絶妙で楽しい。

水溜りこんなところでいいの蝌蚪

蝌蚪には蝌蚪にふさわしい水辺で暮らしてほしいという、蝌蚪への愛情とやさしさがある。どんな環境でもたくましく生きる蝌蚪への応援の気持ちも伝わってくる。

葱坊主とんがらなくていいんだよ

葱坊主には、いかにも腕白そうな言葉の響きがある。先がツンツンとがっているのは、悪餓鬼のヘアスタイルにも見える。葱坊主の空威張りをたしなめて人間社会を思わせる。

片羽つつ展げて鷺の繕へり

句集のタイトルにもなっている「片羽」から、鷺の大きさが伝わってくる。何気ない仕草だが、鷺をよく観察しているからこそ発見できた。

存在感や継ぎ接ぎだらけなる網戸

この句のポイントは「存在感」である。存在感というからどんな立派なもの

かと思えば、継ぎ接ぎだらけの情けない網戸のことと種明かし。満身創痕ながら、真っ新たなものにはない歴史と風格がある。裏切り構成の滑稽句となっている。

ででむしの秘密主義的多動性

秘密主義的多動性という大げさな物言いが滑稽である。秘密主義に「的」をつけて言葉を自在に操っているところが俺的には好きだね。

鬼胡桃轆かせ鴉の有頂天

鴉たちが胡桃を車道に並べて車に轆かせるという風景。「有頂天」だけで鴉たちの楽しさが伝わってくる。カアに轆かせてやったカア。鴉の有頂天に作者も有頂天カア。

孫仔狗仔猫ごちやごちやにて三日

人間の子と犬や猫の子が「ごちやごちや」という言葉で描写されて、無邪気に遊ぶ風景が見えてくる。人、犬、猫の子の対等な関係が描かれて滑稽であり微笑ましい。

青田波ゴッホの筆致現はるる

思いがけない風景や美しい風景に心が動く。それを感動と呼ぶ。その感動をいかに的確に表現するかが俳人の腕の見せどころ。誰も使っていない表現ができるかどうかである。

乳牛の野に放たれて昼寝村

静かで長閑な村の昼の雰囲気を説明しようとする、二百文字ぐらい必要になる。その二百文字を「昼寝村」という三文字にしたところが「技」である。

さへづりの木に新顔の来てをりぬ

「新顔」を確認した。それは鳴き声で気付いたのか。昨日までいなかった鳥を見つけたのか。作者の嬉しさが隠されている。「さへづりの木」という表現もいい。「昼寝村」もそうだが、短縮造語の名技。

強がりは万病のもと春炬燵

「春炬燵」の「ぬくぬく感」を表現したもので、まあのおんびり行こうやとい

う気分がいいね。江戸時代の狂歌「世の中に寝るより楽はなかりけり浮世の馬鹿が起きて働く」を思い出した。

さえずり
囀 はショパンせせらぎはモーツァルト

なるほどそやなあ。音楽的素養があると俳句もオシャレになるね。川柳だと「囀は井戸端会議せせらぎは長談義」ということになる。

◆安遊駟（やす ゆうく）氏は、昭和二十二年、大阪府生まれ。本名は海川美智子。近畿大学法学部卒業後、法律事務所に勤務。弁護士のご主人とともに乗馬を趣味とし、書道では師範の免許を取得して教室も開設する。平成元年、書道の先生であった田代青山より俳句も学ぶようになる。平成九年、日弁連の「弁護士ゼロ地域をなくそう」のキャンペーンに呼応して、北海道新冠町へ移住。馬と暮らしたいという夢もかなえる。俳号の“安遊駟”は、大型ポニーの「ヤスボン」とサラブレッドの「ユークリッド」に由来。平成二十二年、田代青山主宰の「星だより」創刊と同時に入会する。現在、北海道在住。